

第62回小矢部市社会福祉大会

・・・ プログラム ・・・

と き : 令和5年10月28日(土) 13:00~16:00

と ころ : クロスランドおやべ「セレナホール」

日 程

12:30~13:00 受 付

《社会福祉大会》

13:00~14:00 ○ 式典(表彰)・議事

14:05~14:50 ○ 福祉作文朗読
(小・中・高校生 最優秀者 各1名)

○ 福祉教育実践事例発表
(小矢部市立石動小学校)

15:00~16:00 ○ 講 演

演 題 ヤングケアラーの現状と
いま私たちができること

講 師 北陸学院大学教育学部幼児教育学科
講師 松本 理沙 氏

16:00 閉 会

◆「福祉の店」出店コーナー

12:00~16:00 エントランス

[溪明園・福祉作業所あけぼの・トライ工房・斉藤商店]

被表彰者 名簿 (敬称略)

★ 社会福祉協議会長 表彰

◇ 個人の部

太田 節子 (西福町)	✓ 松本 壽夫 (興法寺)
稗田 等 (八和町)	沼田富美子 (水 島)
高木場万里 (中央町)	石上 智暁 (下後亟)
可部谷由喜子 (泉 町)	森田しのぶ (下後亟)
堅田 三郎 (後 谷)	萩澤 清江 (末 友)
山本 善勝 (埴 生)	水木 正美 (南砺市)
馳 美智子 (内 山)	✓ 柴田 道代 (津 沢)
✓ 福島 範子 (菟 輪)	荒田佳世子 (埴 生)

★ 善意銀行頭取 感謝

◇ 団体の部

小矢部市長寿会連合会

★ 小矢部市長 感謝

◇ 個人の部

中島 康子 (城山町)	水嶋まゆみ (八和町)
太田 節子 (西福町)	岩田 雅子 (八和町)
長 行子 (今石動町)	中嶋登志雄 (安楽寺)
馬場美貴子 (八和町)	✓ 山下 勝征 (清 沢)

福祉作文入選者 (市内小・中・高校よりの応募)

◇ 小学生の部

最優秀	石 動 小 学 校	草 詩音	6 年 生
✓ 優 秀	津 沢 小 学 校	高橋美乃莉	5 年 生
✓ 優 秀	津 沢 小 学 校	服部 美月	5 年 生
優 秀	蟹 谷 小 学 校	野尻 睦人	5 年 生

◇ 中学生の部

✓ 最優秀	津 沢 中 学 校	長谷川優月	2 年 生
優 秀	石 動 中 学 校	村上 慶二	3 年 生
✓ 優 秀	津 沢 中 学 校	長谷川日向子	1 年 生

◇ 高校生の部

最優秀	となみ野高等学校	野村 朔来	3 年 生
優 秀	となみ野高等学校	二口紗妃菜	2 年 生

おばあちゃん達との過ごし方

津沢小学校五年 高橋 美乃莉

親せきのおばあちゃんは、施設に入所していました。私は小さい時からよく祖母に連れられて、おばあちゃんの所へ遊びに行きました。おばあちゃん達は、食事とおやつ時にはラウンジに集まって過ごしていました。

その時間帯に行くとおばあちゃんだけでなく集まっている入居者の人達が私達を見て、「よく来てくれたね、かわいいね、声を聞いたら元気出るわ!!」とロ々に言って笑顔で迎えて下さって、私達子供とふれ合うだけで、その場が明るくなる事を子供心に感じていました。

そのころの私はまだ小さくて、行って何もしてあげられませんでした。私達の存在が入居している人にとって光だったのだと思います。それからコロナ禍になって、施設に入る事が出来なくなり、おばあちゃん達に会う事もありませんでした。

今年になって、学校で「高齢者体験」が授業でありました。その時、車いすの押し方や着替えの手伝い方を教わりました。

その時に、昔祖母と行った施設のことを思い出しました。前に私は、おばあちゃん達に顔を見せて、そばにいてあげるだけでした。

今の私だったら何が出来るか考えることができません。歩行のほ助、車いすでの散歩、着替えの手伝い、話し相手、紙芝居をする、そうじなどいろいろあると思いました。

自由に施設に入れるようになったら、今まで学んできた知識を生かして、いろいろしてあげたいです。

おばあちゃん達の喜んでくれる顔を見たいと思いました。

「お年寄りが喜んでくれる事をしてあげたい。何をしようか、何を話そうか。」いろいろ思うだけでも、私はやさしい気持ちになります。

お年寄りとの交流の中で、私自身も学ぶ事がたくさんあり、成長出来ると思います。してあげるといふ押しつけの気持ちではなく、一緒に何をして楽しもうか、ほっこり出来る時間を共有することを考え、その中で一つでも、役に立つ事が出来たら、それが今の私の出来る精一杯の事だと考えて接していきたいと思います。

施設を訪問し、おばあちゃん達に成長した自分を見てもらい、交流出来る日が早くこればいいと願っています。

◆◆優秀◆◆

ひいおばあちゃんの笑顔のために

津沢小学校五年 服部 美月

私のひいおばあちゃんは、働き者で、人のために何かすることが好きな、とても優しい人です。

小さいころに家に遊びに行くと、ニコニコして喜んでくれて、一緒に食事をしたり、遊んでもらったりしました。

二年前、そんなひいおばあちゃんに、もの忘れが出てきて、施設に入ることになりました。

最初に入ったのは、Aという施設です。私たち家族は、施設にいれば安心だと思っていましたが、あんなにニコニコして元気だったひいおばあちゃんの顔からだんだん笑顔が消えていき、しまいには、「死にたい…」とまで言うようになってしまいました。

その時、ちようど知り合いの人の紹介で、Bという施設にうつることができました。

すると、以前のような笑顔にもどり、「楽しい、幸せ」と言うようになったそうです。AとBの施設で何がそんなにちがったのでしょうか。

Aでは、部屋ですごすか、おり紙かぬり絵をするほかに、することはほとんどなかったそうです。

Bでは、食事の準備や片づけをしたり、洗たく物をたたんだり、いろんなところへお出かけに連れて行ってくれたりするそうです。

私だったら、将来入るなら、絶対Bの施設がいいと思います。でも、よくふり返ってみると、私は、高れい者の方には、何でもやってあげた方が喜んでくれると思っていました。例えば、代わりにお茶わんを下げてあげる、荷物を運んであげる：など。

ひいおばあちゃんの話聞いて、それはちがうのかもしれないと思いました。

ひいおばあちゃんは働き者で料理も上手でした。

だから、「食事の準備を手伝って」と言われたら、喜んで手伝っただろうな。手伝いをして、「ありがとう！」って言われたら、人に喜んでもらうことが好きなひいおばあちゃんはすごくうれしくなるだろうなと思ったのです。

ひいおばあちゃんだけでなく、高れい者の方たちは、いろんな経験をしてきているし、その人その人に得意なこと好きなことがあるはずです。それを「すごいね」「ありがとう」と言われた方がうれしいんじゃないかな、ということに気づきました。

これから、ひいおばあちゃんや近所のおばあちゃん達と接する時、「代わりにやってあげよう！」ではなく、その人の好きなことや得意なことを探してみたり、何かお願いしたりしてみたいなと思いました。それが高れい者の方たちの生きる力になれば笑顔がふえて明るい社会になっていくと思います。

中学生の部

◆◆最優秀◆◆

心の余裕をもつということ

津沢中学校二年 長谷川 優月

僕には四歳年下の弟がいる。弟は生まれつきの持病があり、手足を思い通りに動かすことが難しい。だから、日常生活の多くの時間、家族の誰かが近くで見守っている。

もちろん、その見守りの役割は僕が引き受けることも多くある。このことを、「ボランティア活動」と言ってしまうと、とても大げさに思いかもしれない。ただ、僕の考えでは、誰かが困ったり手助けが必要であったりするときに、すすんで声をかけることは、ボランティア活動のひとつではないかと考えている。僕は、時間が空いた時には弟の宿題の手助けをしたり、お風呂に一緒に入ったり、トイレに行くのにも付き添ってあげることもある。でも、毎日のことなので、時には「面倒だな。」と思うこともある。

ある初夏の日、僕の野球の試合の帰り道に家族みんなで車に乗っていた時のことだ。高速道路から見える海に気づいた弟が、海に行きたいと言った。弟の一言で、実際に海に寄ることになったのだが、海岸線まではすぐく遠いことに気がついた。正直なところ、僕はまた「弟を連れて砂浜に行くのは面倒だな。」と思っていた。

時間はかかったが、父、母、妹と僕の交代でなんとか弟を連れ、海岸線までたどり着いた。歩き切ったその先にある夕日にきらめいた海はとてもきれいだ。野球の試合に負けてがっかりしていた僕の気分も、その景色を見て少し落ち着いていた。

昨年、国語の授業で学んだ「『不便』の価値を見つめ直す」という文章の中で、次の言葉があったことを思い返してみた。

「あなたの日々の生活の中で、『不便で嫌いだな。』『面倒くさいな。』とあってさけてきた物事の中に、実は、新しい気づきや楽しみが隠れ

ているかもしれない。」

「物事を達成するのにかかる時間や道のりが多くなる分、発見や出会いの機会が増える。」

僕は、筆者である川上さんの言葉に深く納得した。弟との日常生活がまさにこの表現通りに思えている。

いままでも、そしてこれから、僕の生活の中には思い通りにいかないことがあると思う。そんな時こそ、自分中心の気持ちや考えにとられず、他の人の意見に耳を傾ける心の余裕をもてる人でありたい。そこでまた、僕が海岸で過ごした時間のように、心が晴れるような新しい発見にも出会えるのではないかと思っている。そして、家での弟の生活だけではなく、外で誰か困った人を見かけた時には、「何かお手伝いしましょうか。」と前向きに声をかける気持ちをもっていたいと思う。

◆◆優秀◆◆

叔母といとこから学ぶ心のバリアフリー

津沢中学校一年 長谷川 日向子

今年の夏も千葉から叔母といとこたちが帰省した。叔母は病気で足が悪いため、車椅子ユーザーである。家の中では伝い歩きや歩行器を使う。出かける時は車椅子を使う。叔母は自分の電動車椅子を持っており、普段はそれで移動している。都会のマンション住まいなため、電動車椅子はとても便利だそう。バスや電車もそのまま乗れるそう。また、電動車椅子に乗っていると、一目で身体が不自由であると思われるので、行く先々で知らない人たちに親切にもらえるところもありがたい、助かっているそう。しかし、他人の親切をあてにしているといけないと叔母はいつも言っている。できることは自分で、助けてもらったら感謝を伝える。これが大切と叔母はいつも言う。

さて、帰省した先の我が家は田舎の一戸建てである。玄関には数段の段差。手すりがあるので、なんとか叔母は自力で段差の下まで降りるが、車椅子は母が車に積む。田舎では一人では出かけられないと叔母は言う。確かにそうだと思う。この辺りでは、出かけた先で一人で来ている車椅子の方を見かけることはほぼない。ほとんどが介助者と一緒だ。電車やバスの便がそこまでよくない車社会では、多くの車椅子ユーザーは圧倒的に行動が制限される。自宅では一人で外出できる叔母だが、例えば買い物に出ても買う量は制限される。雨の日や、路面が濡れている日の外出は、車椅子では危険なのでやめておく。このように、健常者では考えなくてよいことを考えなくてはならない。帰省中、叔母が家の中で移動する時は近くに誰かが手を貸したり、邪魔な物をどかしたり、叔母がすぐ座れるように椅子を移動したりした。家族だから当たり前だと思うが、これを家の中だけでなく、外で他人に対してもみんながやれば障がいのある人も外出しやすくなるのではないだろうか。

いとこたちは小学校一年生と年少なのだが、小さい頃から障がいのある叔母と暮らしているので、いろいろなことを自然と身につけているように思う。ちよつとドアを押さえていたり荷物を持ったりすること。そのほんの少しの気遣いで助かる人がいる。そして、まだ小さな子どもではできないことも多いので、周りの大人を頼る力も身につけている。もちろん助けてもらったら、感謝を伝える。基本的なことのように思えるが、私は年下のいとこたちの姿から学んだ。

まずは私たちの心のバリアを取り払うことで、障がいのある人もない人も、助け合い、感謝し合い、より生きやすい世の中になると思う。叔母といとこたちの姿から、多くのことを考え、学んだ夏になった。

【講評】

令和五年度「社会福祉作文」から

小矢部市教育センター 所長 上田 昌寛

市内の各学校では、福祉教育を教育計画に位置付け、福祉を学ぶ時間を設定しています。福祉施設への訪問・交流、レクリエーション大会でのボランティア、社会福祉協議会協力の疑似体験等、数々の活動を通して高齢者や障がいのある方が感じておられる不便さ、大変さを心と身体で感じています。今年度の「社会福祉作文」の応募は、一八一点を数え、あらためて市内の児童生徒の福祉への関心の高さがうかがえました。各学校をはじめ、家庭・地域でのご支援に感謝申し上げます。

どの作品も体験を通して感じたことや考えたことが素直な言葉で表現され、審査員一同、心を打たれたとともに数多くの作品から最優秀賞・優秀賞を選出する難しさを痛感しました。以下、最優秀賞受賞の作品をご紹介します。

(略)

津沢中学校の長谷川優月さんは、生まれながらに持病のある弟と自分も含めた家族との生活の中で手助けを続けている自分の立場や役割をしっかりと捉えています。さらに、国語の学習中に出会った文章と弟との日常生活を重ね合わせ、自身の心に余裕をもつことで他者への思いやりや新しい発見への出会いがあるのではないかと考えました。家族の枠を越えて社会全体に対して前向きに関わろうとする姿勢が伝わってきました。

(略)